

2020年度
関西学院大学ロースクール
A日程

一般入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論 文 問 題】

問題文（A）および（B）を読んで、以下の〔設問1〕および〔設問2〕に答えなさい。なお、問題はその用語に関わらず、法的知識や法的素養を問うものではない。

〔設問1〕

問題文（A）において、筆者がいう「不法侵入者」とはいかなる意味か、問題文に則して定義したうえで、不法侵入者としての①権威あるテキスト、②ソクラテスの問答法、③イエス・キリストの信仰とを対比し、その差異を簡潔に説明しなさい（600字程度）。

〔設問2〕

問題文（A）と（B）においてそれぞれの筆者は、私たちが「考える」うえで最も重要なことは何だと考えているか、それぞれの筆者の考え方を対比したうえで、両者の考え方が対立するのか、それとも両立するのか、あなたの考えを簡潔に述べなさい（400字程度）。

なお、解答に際しては、問題文（A）をA、問題文（B）をBと略してよい。

問題文 (A)

人間は、必ずしも、徹底した探究を好まない。人間には、考える欲望やどこまでも知ろうとする好奇心が生来備わっているかのように言われることがあるが、それは誤りである。私が見るところ、人間は一定の水準を超えて考え、知ろうとはしない。むしろ、人間はときに、思考を積極的に拒否しさえする。思考・思想への渴望は、人間の本来的な欲望の中には含まれていないのだ。この事実は、ジャック・ラカンやジル・ドゥルーズがすでに指摘してきたことである。ドゥルーズは、人間をあえて考えさせるには、外部からのショックが必要だと述べ、そのショックを「不法侵入」に喩えている。

こうした洞察は、思想（史）の研究者であれば誰もが直観しているある事実、見ようによってはスキャンダラスとも言えなくはない事実、少なくとも啓蒙主義以降の理念からするとかなり不都合な事実を、説明してくれる。かつて、学問とはほとんど、正典とされた権威あるテキストの解釈であった。真理は、権威あるテキストに書かれていると見なされていたのである。だが、啓蒙主義は、真理を、こうした権威あるテキストの桎梏から解き放った。真理をめざす思考の自由と無条件の権威とは両立しない。これが啓蒙主義の信じるころであった。ところが、啓蒙の時代の後でも、「権威は思考の自由を妨げる」という命題は、必ずしも妥当しないのだ。

たとえば、マルクス以降の経済学や社会科学、フロイト以降の心理学や精神医学、あるいはソシュール以降の言語学や言語思想を思い起こしてみればよい。マルクス、フロイト、ソシュール等のテキストは、ときに、批判を超越した権威と見なされている。

(中略)

たとえば精神分析において、フロイトのテキストは、他の者たちの論文や著作、つまり弟子やフォロワーたちのテキストと同格に扱うわけにはいかない。後者に関しては、事実と反することや辻褄のあわないことが書かれていれば、「誤りだ」と批判すればよい。しかし、フロイトのテキストの中に、筋の通らないことや事実誤認らしきものが見つかったとしても、ただ反駁して、斥けるわけにはいかない。そういうときには、フロイト自身に批判させるしかないのだ。たとえば、後の「死の欲動」の発見に伴う認識論的な断絶によって、その部分は乗り越えられた、等と。マルクスやフロイトやソシュールのテキストは、まさにかつての宗教的な正典に類する権威を帯びているのである。

こうしたことは、啓蒙主義の観点からするとたいへんよろしくない状況である。マルクスのテキストに縛られずに、自由に資本主義のメカニズムを分析すべきである。フロイトのテキストから自由に、人間の心理の様態を実証的に研究すべきである。ソシュールの講義に執着せずに、虚心に言語の実相を調べるべきである。これが啓蒙主義の推奨することであるし、実際に、そのような研究もたくさんなされてきた。ところが、である。問題はこの先だ。啓蒙主義からするとまったく誤算と言わざるをえないことに、こうした自由な探究は、必ずしも、深く実り豊かな結果をもたらさないのだ。むしろ、逆に、しばしば、自由なはずの研究は、権威に拘束された探究よりもはるかに浅薄な命題しか導きだせない。たとえば、フロイトのテキストを反証可能な仮説の一つとしか見なさないような、実証主義的な心理学は、フロイトに教条主義的に拘泥する研究よりもはるかに貧困なことしか主張していない。この点を納得するには、フロイトのテキストに執着したジャック・ラカンが、人間についていかに深い発見をしてきたかを思い起こすだけで十分だ（…略…）。

どうしてこんなことになるのか。マルクスやフロイトやソシュールのテキストが、研究者にとって、不法侵入する他者としてたち現れているからではないか。不法侵入がないとき、思考は、いわば中折れし、途中で萎えてしまう。だが、不法侵入があるときには違う。不法侵入してきた他者（マルクス、フロイト、ソシュール）は、研究者にとっては、真理を知っているはずの超越的な他者として現れている。研究者は、その「真理」をわが物にしないうちには、その他者の侵入にともなう居心地の悪さ、違和感、衝撃を克服することができない。探究は、他者の内にあるところの「真理」に到達したと実感されるまでは、絶対に終わらない。権威から自由な思考、したがって不法侵入にさらされていない思考が、権威に拘束された思考に比べて、ときにはるかに浅いのは、こうした理由によるのではないか。

さて、そうだとすると、思考をさらに深める方法、思考の歩みをまださらに引き延ばす方法がある。重要なのは、他者の現前、不法侵入と感じられてしまう他者の現れである。しかし、他者が所有している真理に到達したと直観した地点で、思考の歩みは停止する。このとき、思考を触発し続けていた不法侵入者は、無害な客人に転換しているのである。こうなると、思考は、もう深化しない。こうした思考の停止を無効にし、さらに思考を継続させることはできないか。できるのである。私の考えでは、それこそ、ソクラテスのやり方、ソクラテスの問答法だった。

ソクラテスは、アテナイの広場に出かけていき、そこで出会った市民をはしから挑発的な問答に引き込んだ。ソクラテスは、自分自身を、市民一人一人につい

て回る虻に喩えている。まさしく不法侵入者である。ただし、ソクラテスの問答は、非常に変わったものだった。彼は、自分の見解、真理についての自分自身の見解を説いたりしなかった。ソクラテスが行ったこと、それは、まず相手の命題を全面的に肯定した上で、その相手とのやりとりを通じて相手に考えさせ、結果として、相手をして、もともと彼が提示した命題を否定する反対命題を引き出させることだった。こうした問答を通じて、ソクラテスの対話の相手は、自分が最初に真理であると見なしていた命題が真理ではなかったことを納得する。

しかし、ソクラテスは、なぜ、いきなり真理を説かずに、こんな方法を用いたのか。ソクラテス自身も、何が真理かを知らなかったからである。彼が、他の人より優っていたのは、ただ、自分も真理を知らないということを知っていたということに尽きる。この方法は、対話相手の思考を簡単には終わらせない。ソクラテスがもし真理を知っているのならば、相手は、その真理に到達した時点で、思考を終結させることができるが、ソクラテス自身も真理を知らないとなると、ソクラテスの域に達しても、探究は終わらない。ソクラテスは、相手の思考の触媒であることに徹している。だから彼は、自分の問答法を産婆術に喩えた。結局、対話相手は自分で自分の誤りの自覚に達しているのだから、放置しておけば彼が自然と同じ結論に達したかといえ、そんなことは絶対にはないはずだ。ソクラテスという不法侵入者＝産婆が不可欠だったのである。

とはいえ、ソクラテスの問答法においては——ソクラテスもその相手同様に真理を予めは知らないが——なお、真理が存在していることは前提である。そこで、この問答法は、実は最初から潜在してはいたが、忘れられていた真理の「想起」という形式を取ることになる。想起が完了したときには、やはり思考は安住し、探究は終わりを迎える。

すると、ソクラテスよりもさらに徹底した不法侵入者、純粋な不法侵入者は、イエス・キリストだということになるのではあるまいか。イエス・キリストは、いつまでたっても安全な客人へと転換しない不法侵入者ではないだろうか。どのような意味において？ キリスト教、つまり「キリストの信仰」という語の両義性に注目すればよい。キリストの信仰とは、一方では、神であるところのキリストを（信者が）信仰することだが、他方では、人としてのキリストが（神を）信仰することでもある。後者のように解した場合、つまり「の」を主格と見なした場合には、キリストは、人々にとって、信仰のロール・モデルである。人は、キリストが神を信仰するように、神を信仰しようとするのだ。キリストは、純粋な信仰において、神＝真理を知る者であり、人はその信仰に漸近しようとする。

だが、しかし、究極の地点で、驚くべき逆説が待っている。十字架の上で、死の直前の断末魔の叫びとして、キリストは、父なる神への不信を表明するのである！理想的な信仰を体現しているはずのキリスト自身が、信じていないのだ。つ

まり、あの瞬間、神自身が神を信じていないのだ。最初、キリストは、神を信じ、真理を知るものとして人々の前に現れる。人間は、キリストを媒介にして信仰し、思索し、そして真理を得ようとする。が、最後にキリストが示すものは、神＝真理の存在への懐疑である。人は、キリストが所有しているはずの真理を目指していたのに、そこは〈無〉かもしれないのだ。そうだとすると、思考は、永遠にゴールに到達することができず、いつまでも懐疑をめぐって循環し続けるしかない。だから、キリストは、人間の思考にとって、ソクラテス以上にやっかいな不法侵入者、歓迎できる客人にはなりきれない不法侵入者である。

(以下略)

大澤真幸著『考えるということ 知的創造の方法』(河出書房新社、2017年)より抜粋。なお、本文中の小見出しは省略した。

(B)

こうして問いを重ねることで、考えることは広がり、別の角度からものを見られるようになる。哲学的かどうかはともかく、問いは思考を動かし、方向づける。だから、考えるためには問わなければならない。重要なのは、何をどのように問うかである。

とはいえ、私たちは、そもそも問うことに慣れていない。私たちがもっぱらやってきたのは、与えられた問いについて考えることだけである。典型的なのは、やはり学校である。

学校で使う教科書には、たくさん「問い」がのっている。それらは、望んでもいないのにいきなり目の前に突き出される。だがそうした教科書の問いは、テストも成績評価もなかったら、まして学校から離れたら、誰も「面白そう!」とか「解きたい!」などと思わないだろう。それでも問答無用で「解け!」と言われる。それで仕方なく解く。

このような問いは、決められた手続きが分かっているならば、答えにたどり着くことができるが、それが分からなければ、答えは出ない。正解以外は答えではなく、自分の思うように考えて自分なりの答えを出すことは許されていない。それを解くプロセスを「考える」と呼び、「考えて解け!」と言われる。

だが、教科書に出てくる問いを見て、「これこそ私が考えたかったことだ！」と思う人は、おそらくただの一人もいないだろう。そのように押しつけられた、興味もない問いを「解く」ことは、考えることではない。考えさせられているだけで、強いられた受け身の姿勢を身につけるだけである。

しかも、いやいや解いているので、答えが出てしまえば、さらに問い、考えることにはつながらない。それで終わってしまう。自ら問わなければ、考えることではないのだ。では自ら問うとはどういうことか。

考えるには、考える動機と力がある。自分自身が日ごろ、疑問に思っていることはつい考えたくなる。考えずにはいられない。こういう考える力をくれる問い、つい考えたくなる問い、考えずにはいられない問い、それが自分の問いであり、そうした問いを問うのが、自ら問うことである。

(中略)

たとえば、お金に関してであれば、「何のためにお金があるのか」「どうやったら効率よくお金を稼げるのか」「どれくらいのお金があるのか」等々の問いが出てきたとする。そうしたらさらに関連して、「なぜ自分はお金が必要なのか」「お金で買えないものは何か」「お金で物を買って自分が手に入れようとしているのは何か」「お金と名誉とどちらが大事か」などと問いを広げていく——こうした問いを考える作業は、慣れてくればそれほど難しくなく、対話の場で他の人といっしょにやるのは、とても楽しく、スリリングである。

このように自分で見つけた問いは、考えるのも楽しいし、自分でついつい考えてしまう。哲学対話の後、多くの人が「すごく頭を使った」とか「考えすぎて疲れた」という感想をもつ。

にもかかわらず、気の進まないこと、もともと興味がないことを考えた時とは違って、充実感がある。とても晴れやかでうれしそうな表情をする。学校でやると、生徒たちは喜々として「楽しかった!」「いっぱい考えた!」と言う。地域コミュニティでやった時は、「これまでの人生でいちばん幸せな時間だった」と言われたことがあった。

考えることは、エネルギーも使うが、元気もくれる。自ら問いたいことを問い、そこから考えることは、普段私たちが知っている「問題を解くために考える」＝「考えさせられる」のとは、まったく違うのである。

(以下略)

梶谷真司著『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』(幻冬舎新書、2018年)から抜粋。なお、本文中の小見出しは省略した。

2020 年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【A 日程：論文】

《出題趣旨》

AI の脅威が喧伝される中、ロースクールに限らず、知識よりも思考力が重視されるようになってきた。そこで、「考えるとは？」をテーマとした 2 つの文献をとりあげ、その対比を「考える」問題とした。

設問 1 は、法律を学習する上で重要な能力を図る意図で、言葉が一般に持つ意味をその文脈においてより厳密に定義できるかを問う問題と、その定義のもとでの 3 つの例の差異を明らかにさせることで論理構成力を問おうとする問題とした。

第 1 の文章は、知的探求作業を職業とする研究者などの知識人を前提とした「考える」テーマを扱っているのに対して、第 2 の文章は、市井の一般人が主体的に「考える」ために「問いを立てる」ことを習慣づけるという実践的な提案をしている。両者には、想定している人間とアプローチに明らかな差異がある。一見して差異があるから矛盾するのか、それとも両者は根本的な部分では両立するのか？その問いに対して自分の見解を示すことを通じて、対象を深く理解する能力、そこから本質を短く抽出する能力、その関係について自分の意見を論理的根拠をもって展開する能力を見ようとしている。

《解説・講評》

【解答例】

設問 1

思想の不法侵入者とは、徹底した知的探求を必ずしも追及しない人間に対して、外部から否応なしにショックを与え、人間を考えさせ続ける思想体系ないし超越的な存在を言う。

マルクスなどの権威あるテキストは、深い体系的学問として現れ、研究者は権威者が到達した「真理」をわが物にしないうちは、その衝撃を克服することができず、権威者が到達した「真理」を理解するため考え続けなければならない。ただし、その権威に「到達した」と実感すれば探求が終了する。

次に、ソクラテスの問答法は、「真理」の存在を前提にしつつも、ソクラテスが「無知の知」つまり真理を知らないことを知っているとして、問われた人に対して真理の探究を続けることを強いる。しかし、その人が真理を想起したと考えれば探求は終了する。

最後に、キリストの信仰は、神の遣いとしてのキリスト信仰と人としてのキリスト自身の信仰という意味を含むところ、人としてのキリストは磔に際して神＝真理の存在への懐疑を示した。その結果、真理（神）の存在への懐疑によって思考は循環し続ける。そこにはゴールがない。

このように 3 者は、権威あるテキストは権威者が構築した「真理」にいかに近づくかを考えさせ続け、ソクラテスはどこに真理があるのかを探求させ、キリストの信仰は果たして真理は本当にあるのか、懐疑

をもってエンドレスに問い続け、後者になるほど思考の持続性が高くなると筆者は位置づけている。(600字)

設問2

論文Aは、人が考えるためには、「不法侵入者」という外部からの半強制的な問いかけが不可欠であるとするのに対して、論文Bは何より自らが興味がある問題についての内発的な問いが重要であるとする。このように両者は、強制と自発性という点で対立するように見えるが、私は両立すると考える。

まず論文Aは主に研究者が学問分野において高度な知的作業を扱う場合の手法である。そこでは先行研究を理解しつつ、根本的にそれを疑う姿勢が要求されるため、研究対象への理解と批判という相反する力が働き、より深い問いと思考を生み出す。

しかし、外から与えられた問いに答える教育を受けてきた一般人は、考え続ける動機と力を備えていない。そこで自らが興味を持つ問題について、自主的に考える日常的な場で問いを作りだす体験を重ねることで、さらなる知的探求への基礎体力を養うことが効果的なのである。よって両者には考える訓練の段階を通した連続性がある(400字)。

【講評】

設問1で「定義」というとき、まず形式論として「～とは、～を意味する」といった文章になるはずである。「不法侵入者とは～する者のことである」といった形式をまずは踏まえてほしい。そこでのキー概念は、外部性、強制、考えさせる(ショックを与える)機能、権威者あるいは思想体系などである。

①権威あるテキスト、②ソクラテス、③キリストという3つの「体系」を対比するとき、「真理」をどうとらえているか、そこで真理への到達が終了するのがポイントである。

さらに①から③について筆者は単に羅列しているのではなく、後者ほど思考の持続性が高いという位置づけを行っていることも落とせない。

答案については、定義は比較的できていたと思うが、定義の上記定式を踏まえない答案も一定数あった。

①から③の関係について良くないパターンはコピペによる「羅列」である。また、①についてやたら詳しく書いて②③の字数が足りなくなるアンバランスな答案も散見される。

やや驚いたのは、③についてキリストが神の存在を信じていないというような誤ったまとめになっている答案が一定数あったが、人としてのキリストが磔の際に神への懐疑を表したという指摘であって、神の否定はありえない。

設問1は問題文に沿って、定義、①②③のエッセンスの要約、その位置づけと展開することが素直である。問いに対応して構成が素直である答案は印象がよい。

設問2については、思考の能動性と受動性といった対比からただちに対立するとか、考えさせ続ける点で共通だから両立するとか、やや平板な記述が目立った。両立するか矛盾するか、という問いは、その両面が内在しているからこそ発せられているから、安易に共通する部分を抜き出して両立するとか、逆に対立する部分を箇条書きして矛盾するといった論述では浅すぎる。

外部強制と内発性という考える出発点の「違い」があるが、矛盾はしないとするならば、単に考えさせる目標が同じだから矛盾しないというだけでは足りない。ゴールが同じでも方法論が違えば厳しい対立

につながる。解答案では、方法論の違いは考える力が養成されるステージの違いとして（ステージが違えば方法論も違う）矛盾がないとしている。

逆に、権威あるテキストなどからの問いを重視することは、自発的問いを発する機会を奪い、結局、考える動機と力を失わせることになるといった、教育方法論的観点から両者には決定的な対立があると考えられることもありえよう。教科書に頼る日本の教育の弱点はまさにここにあるというような批判である。

自説を書く場合、必ずその反対の考え方も一度検討したうえで、それでも自分はこちらの意見をとるのだという検証プロセスを踏んでから書き始めてほしい。反対の立場も考慮することで、「考える」プロセスがさらに深化し、論理がより緻密になるからである。